

2024年1月7日 説教「神を待ち望め」

詩篇 42 篇 1～5 節

2024年を迎えました。今朝は姉ヶ崎キリスト教会、今年の御言葉「神を待ち望め」(詩篇 42:5)を学びます。詩篇には賛美、祈り、信仰に基づく詩想などがあります。多くの方が、共感と励ましや慰めを得てきました。詩篇は150篇あり、五巻から成っています。42篇は第二巻最初の詩篇です。表題には「指揮者のために。コラの子たちのマスキール」とありますが、マスキールとは教訓の詩と言った意味で、コラはレビ人の家系(レビ 16章)の人であり、賛美のリードをしました。



### 1. 生ける神を求め (1～2 節)

① 鹿が谷川の (1) 「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」

パレスチナには鹿が多く生息していました。足は速いのですが、羊と同じように弱い動物でした。その鹿にとっても水のある場所を見つけることは大変だったようです。ここには「谷川の流れを慕いあえぐ」とありますが、喉を渴かせて、谷川の水を必死になって求めているさまがわかります。詩人はそんな鹿の姿に自らをなぞらえます。つまり、自分のたましいも主なる神からの水を求めて必死になっているということです。

② 渴いています (2) 「私のたましいは、神を、生ける神を求めて、渴いています。」

詩人は言います。「私のたましいは、神を、生ける神を求めて、渴いています。」と。「たましい」というのは、神と結び合うところです。そのたましいが水源地とも言える、生ける神を求めて、渴いているということです。体内に水が不足すれば、生命が危うくなります。そして喉はからからに渴いてしまいます。たましいの水も不足すれば、霊的生命が弱るのです。

③ いつ神の御前に (2) 「いつ、私は行って、神の御前に出ましようか。」

しかし、彼は、いつ神の御前に出たらよいのかと、迷っています。さっさと主の前に出れば良いのと思われる向きもありましようが、心の中はいろいろと錯綜していて、素直になれないし、主はこんな自分を受け入れてくださるだろうかと不安も生じてくるのです。

### 2. 批判のなかで神の家を思う (3～4 節)

① 私の涙は (3) 「私の涙は、昼も夜も、私の食べ物でした。」

彼はよく涙を流していました。食べ物をとる事が日常であるように、昼も夜も、瞼を濡らしていたのです。

② お前の神はどこに (3) 「人が一日中『お前の神はどこにいるのか。』と私に言う間。」

彼の周りには、神を認めない者たちがいました。そして言うのです。お前が信じている神は一体どこにいるのか。お前が苦しんでいるのに助けしてくれないのか。神なんかいるはずがないと批判するのです。それほどに不信の者たちは勝ち誇るように言うのです。かといって、それに反抗する

ことができないくらいに、詩人のたましいは弱っていました。

- ③心を注ぎだし (4)「私はあの事などを思い起こし、私の前で心を注ぎ出しています。私がああ群れといっしょに行き巡り、喜びと感謝の声をあげて、祭を祝う群集とともに、神の家へとゆっくり歩いて行ったことなどを。」

詩人はどうやら聖所から遠く離れた所にいたようなのです。かつて、彼は神を信じる人々とともに聖所あたりに行き巡り、感謝と喜びの声をあげ、神を喜ぶ者たちとともに祭を祝い、神の家である聖所のある神の家へと歩いて行ったものなのです。ところが、今はそこからはるかに離れた地であって、ある面では孤独でした。ともに祈ったり、賛美したりする仲間がいなかったのです。周りには、彼を非難する者ばかりです。しかし、そんな中で、かつて受けた恵みを思い出しつつ、詩人は心を注ぎだして祈ったのです。つまり、聖所から離れていても、どこにでもいてくださる神の前に、自分の思いのたけを注ぎだしたのです。

### 3. 絶望から待望へ (5 節)

- ①うなだれて (5)「わがたましいよ。なぜお前はうなだれているのか。」

彼は自らのたましいに呼びかけます。なぜお前はうなだれているのかと。新改訳二版では「なぜ絶望しているのか」とありますが、それほどにがっかりしていたのです。

- ②思い乱れて (5)「私の前で思い乱れているのか。」

彼の心は乱れていました。沈み、うめき声が出てきそうです。失望し、落ち込む気分が襲ってくる。それが彼の実態でした。

- ③神をほめ (5)「神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。」

しかし、ここに彼のうちに宿っていた信仰がよみがえってきたのです。「神を待ち望め!」。「おまえはそんなに沈みこんでいる今こそ、神をほめたたえるのだ。それしかお前にはない。神をほめたたえるしか道はない。いや、神だけが希望なのだ。「神を待ち望め」。神はお前を祝福し、導いてくださる。不信仰を捨てて、神の前に出よ。神を信じよ。「御顔こそわが救い」だ。主はこの場所にも御臨在くださる。主は私に救いをもたらしてくださるのだ。このように、詩人は自らに呼びかけているのです。

### 《結論》

あなたはどんな時に思い乱れますか。あるいは、どんな時に、あなたは落ち込みましたか。私がこの地に来た時はまだ 30 歳代でした。働きも進んでいませんでしたし、将来に対する見通しも立ちませんでした。同世代の人々が世の中でばりばりと働いている姿が目映ってきて、このようなことをしていて良いのだろうかと思った時がありました。そうした時に、励まされたのはやはり、御言葉でした。「先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起こ

ろうとしている。あなたがたは、それを知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。」(イザヤ書 43:19)という御言葉は、見えてこない現実に、希望をもって生きる勇気と信仰を与えられたものでした。

さて、今朝読んできた詩篇の作者には、二つの不安定にさせるものがありました。一つは、彼を批判する人々の存在でした。彼が落ち込んでいるのを見て、神を信じない者達は、「お前の信じる神などいないよ、何も助けてくれないではないか。」などと言うのでした。彼なりに反論もしたでしょうが、やはり彼らの言うことは、心に突き刺さり苦しんだに違いありません。このような時に、共に祈る友がいればうれしいです。しかし、ヨブのような場合もあります。つまり、ヨブは神を信じる友から「お前が、何か悪いことをしたから、このようになったのではないか。」などと、責められてきました。これもつらいことです。もう一つは、詩人自身の内面のことですが、彼はかつて、聖所を近くに作る都にいたことがあるようです。その時には恵まれていて、喜びや感謝の言葉が自然に湧き上がってくるような環境でした。それが今は、はるか離れた所に置かれ、なんとも霊的な刺激に乏しかったのです。外からも内からも疲弊させる材料があつて、彼の心は渇いていました。彼は霊的恵みを求めていました。

キリストは「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」(ヨハネ 7:37)と言われました。そして「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」と言われました。それは御霊の働きのことを言われていました。新約時代にあるあなたが霊的に渇いているなら、こうした招きがキリストによって、与えられていることをまず覚えておきましょう。

その上で、元の聖書箇所に戻りますが、かの詩人は絶望して、うなだれていました。そんな時に、彼の内から霊的な声が響いてきたのです。「神を待ち望め」。意気消沈している時には、否定的な考えが先立ち、希望が消えいりそうになるのです。そんな中のお言葉が「神を待ち望め」だったのです。失われたものを人間の力で取り戻そうとすること、他の人間に期待すること、力のある人間に望みをかけることは、「神を待ち望む」ことの反対にあります。なぜでしょうか。人間がなすことの根っこには、自己中心、気まぐれ、利益追求などがあるからです。もちろん、どこまでも温かい心を持った方もいます。そうなれば、依り頼みたくもなります。しかし、人間は究極的に望みをとはなりません。罪深く、不確実で、弱い人間だからです。しかし、主なる神は、永遠の神です。地の果てまで創造された方です。その英知は測り知れません。(イザヤ 40:24)。疲れた者に力を与え、活気を与え、知恵と助けを与えてくださる方です。まどろむこともなく、眠ることもなく見守って下さる方です。そのような主なる神こそ、渇きを満たしてくださる方です。待ち望むべき方です。

彼はこの詩篇の末尾の 11 節でも「神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる」と記しています。私たちも新しい年、落ち込むこともあるかもしれませんが、しかし、この詩人と同じように、弱る自分に語りかけましょう。お前は何をがっかりしているのだ! 恵み深い永遠の神を待ち望め! と。